2021年12月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第539号

地方小出版 情報誌 アクセス

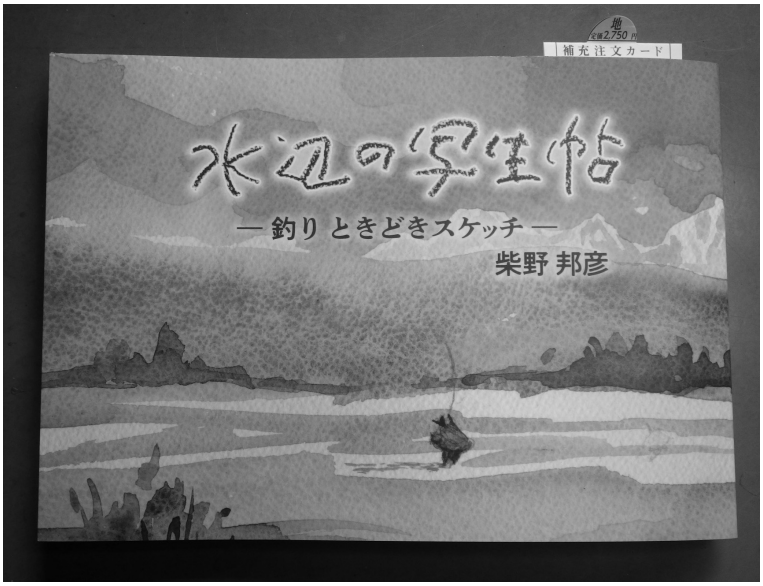
毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

水辺の写生帖

百万一冊目の釣りの本

文／画家・エッセイスト　柴野邦彦



『水辺の写生帖』柴野邦彦著／プロモビス刊
A５判・本体価格2500円・ISBN978-4-9912254-0-6

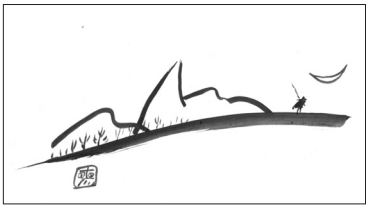
古今東西、釣りの本はたくさん書かれてきました。もちろん、なんとかして他人よりもたくさん釣りたい釣り人の競争心に付け込んだ技術書が多いのは当然ですが、そうでない、ただ岸辺に座って水面に映る雲の行列を書いたような本も多いのです。スケートボードとかバスケットボールとか、あるいは砲丸投げのようなスポーツのジャンルで技術以外のことを書いた本をこんなにたくさん見つけることは稀なはずで、これは釣りのような自然相手の活動に限った特殊事情かもしれません。

それはなぜかと考えると、やっぱり釣りなどというのは、たかが釣りで、年寄りとか暇人のやることで、だから暇にあかせて雲の行方などを文章にする暇があるのだろうと思われます。

けれども、釣りと一口に言っても、いろいろなジャンルがあり、現在の若者などにはもっとスポーツ的な、闘争心をかきたてる釣りに人気があります。ルアーと呼ばれる疑似餌を投げて釣るバス釣りなどがその典型で、大きな賞金のかかった大会などがあります。優勝して賞金を手に入れるためには誰よりも早く釣れそうなポイントに行かねばならず、何千万円もする強力なモーターボートを買い込み、その賞金で生計をたてるプロと呼ばれる人たちもいます。釣りも年寄りと暇人の専売特許ではなくなったようです。

釣り人というのは水溜まりがあればどこへでも出かけていく人種で、その水溜まりは太平洋であっても雨後の道路の凹みに溜まったものでもかまわないのです。水溜まりにもいろんな種類があって、大きく分けると、水がしょっぱいものと、しょっぱくないものがあります。その塩分の多い方では釣りは船から釣るものと岸から釣るものに分かれます。さらに、船ではキスやアジなどの小物釣りがあり、一方ヘミングウェイがやるようなカジキマグロなどの大物釣りがあります。その違いはあまりにも大きいので、釣りとは言え、ほとんど別の世界と考えた方がいいでしょう。

オカッパリの方でも半ズボンに麦わら帽子、空き缶にゴカイを入れてのハゼ釣りがあり、無人島に出かけて行って大波にさらわれないよう磯にロープで身体を縛り付け、イセエビやサザエを惜しげもなくぶっこんで魚をおびきよせ、イシダイやクエなどを釣る、金持ちにしかできない釣りもあります。淡水の釣りでは、水の動かない池や沼で釣るものと川で釣るものがあり、池ではフナやコイ、手長エビなどを釣ります。中には2，3センチの小さなタナゴ釣りなどというものがあって、これは小さければ小さいものを釣ったほうがエライとされています。道具はすべてミニチュアで竿は一メートルもなく、釣り針の先は天眼鏡で見ながら研ぐのです。そして釣る範囲もその竿で届く範囲で、ほとんど拡げた股の間を釣るようなものです。それでもそこに



月と道連れ

一日座っていられるのですから、まさに壺中の天といったところでしょう。

川では下流のスズキやボラから中流域のウグイ、オイカワ、そして渓流でのヤマメ、跨いで跳び越えられる程度の源流でのイワナ釣りなんかがあります。それぞれの釣りにはそれぞれに進化した道具があって一人でそれらのあらゆる釣りに手をだそうとすれば、肉体的にもサイフももたないので、たいていは守備範囲とする釣りが決まってきます。

どの釣りにも共通して言えるのは、釣り人の気質、性格、品性に関することで、なにがなんでも魚をたくさん釣らないと気のすまない人、どうしても他の人より多く釣らないと人生が暗くなる人、釣りは魚の気分次第で三つ四つ釣れば、後は木陰で昼寝をすればいい人とに大別できます。もちろん、勝負に目くじらを立てるようでなければ、社会の上昇気流に乗れないような気がしますが、遊漁というのはそれで生計を立てる訳ではなく、漁獲高のノルマを達成しなければならない労働でもないので、満足も幸福度もまったく自己責任なのです。

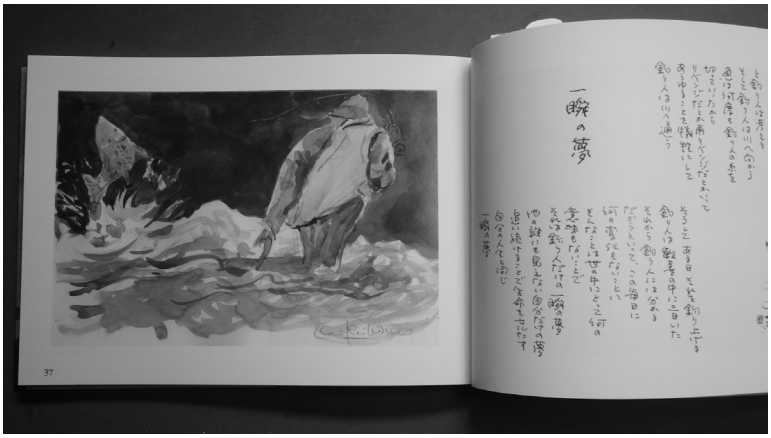
同様に遊漁というのは投下した資本とそこからあがる利益勘定の辻褄が合わないことが多いのですが、誰もそれに文句を言いません。東京から青森まで、高速料金とガソリン代を払って、たった数匹のイワナかヤマメを釣って帰ってくるとなると、その一匹当たりはいったいいくらになるのか、考えただけでも頭がクラクラしてきます。

余談ですが、日本人が世界中のクジラを追い回すからクジラが絶滅してしまうと外国の方で言いますが、日本の商売人がそれをやっている限り、クジラはいなくなりません。クジラが少なくなれば、ある日船の油代との釣り合いがとれなくなるからです。そうなると、クジラ捕りは商売として成り立ちません。問題は、国籍を問わず遊びでクジラを捕りに行く大金持ちが現れることです。油代など気にせずに最後の一匹まで追いかけるに違いないからです。

しかし、この狩猟本能というやつは都会生活しか知らない人間でも、誰もが自分の中に冬眠状態のものを持っていて、それは裸で食べる物を追いかけて駆け回っていた頃の記憶らしいんです。うちのカミさんなどは、艶のいい茶色のゴキが冷蔵庫の下からほんのちょっとヒゲをのぞかせるのを見ただけで、狩猟本能が目覚め、スプレー缶を片手に家の中を走りまわります。そしてどうしても見つけ出して殺さなければ気が済まないという冷酷さを発揮します。これはカミさんが悪いのではなくて狩猟本能が悪いんです。

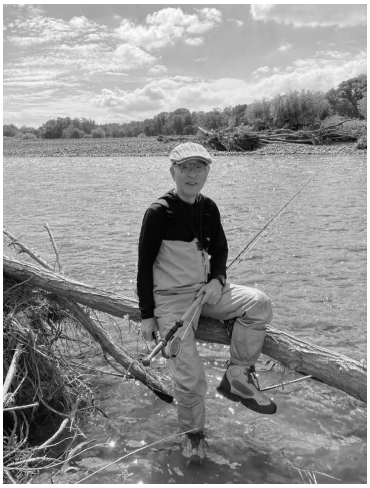
私の釣りの友人で、ステージ４のガンに侵されたのがいました。病院に入ったり出たりして何度か手術をし、小康を得た時、私に釣りの誘いの電話がかかってきました。残念ながら、何かのヤボ用があって一緒に出かけられなかったのですが、後で報告がありました。もう身体が衰えていて自然の河原を歩き回るなどということは不可能だったので、管理釣り場という川を区切って魚を入れてあるところへ行きました。そうした場所では、フランス料

水辺の写生帖 p30~31



水辺の写生帖 p36~37

水辺の写生帖 p62~63



筆者近影、犀川にて

理一回分くらいの入漁料をとりますが、とにかく魚はたくさんいて、しかもキャッチ・アンド・リリースといって釣った魚は針を外して水に戻してやるというシステムになっています。魚はパチンコ屋の玉みたいなもので、何度も使えるという訳です。言ってみれば、疑似自然状態のゴルフ場みたいなものです。彼はそこで釣っては放し、釣っては放しと釣りまくったそうです。それは食べるためでもなく、売るためでもない、ただ魚をいじめ続けるという行為だったのですが、それを電話で話す彼の声は元気と自信にあふれていました。

それから一ヶ月ほどして彼は旅立ってしまいました。あの時、彼はそうして他の生命を相手にすることで、自分の生命を確認していたのでしょう。そうすることで、彼の生命は一瞬の輝きを取り戻したのです。

もうずいぶん昔に読んだのでうろ覚えですが、オーストリアの動物行動学者、コンラッド・ローレンツがジュズカケバトの話を書いていました。二羽のジュズカケバトを一つの籠の中に入れておくと、強いほうが弱いのをつつき、しまいにはつつき殺してしまうというのです。しかも、死んだハトをまだつついて目玉を抉り出してしまうそうです。戦う牙を発達させたオオカミの場合は殺し合って自分の種を絶滅させないために、負けたほうが降参のサインをだすと、もうそれ以上攻撃できなくなる体内システムも同時に発達させました。ところがジュズカケバトにはそれがないのです。しかし、自然の中ではこの籠の中のジュズカケバトのようなことは起きません。弱いほうのハトがいつまでもつつかれるのを我慢していないからです。翼があるので、飛んで逃げればいいだけなのです。

人間種の現代社会の中ではこの籠のジュズカケバトのような状況がしばしばみられます。籠はなくても、組織の論理や、企業の論理、政治の論理はしばしば個人を不自由にします。そして人間関係のしがらみは状況を複雑にします。そこでは自分の翼を拡げて、羽ばたけない毎日があります。一日机にかじりついて座ってばかりの現代の生活は人間種の歴史の中ではつい何秒か前に始まった形態です。それまでの長い間に、山野を走り、獲物を追いかけるように作られた人間種の肉体はまだこの新しい生活形態に順応できていないのです。だからでしょう、週末を自然の中に出て、歩き、腹をすかせ、冷たい風にあたると肉体も精神も本来の自分を思い出すのです。水辺で浅瀬の水が光の粒を跳ね上げるのを見、柳の葉を裏返す風が頬を掠めるのを感じ、森の奥にカッコウの声を聞くことは単

春の嵐

なる暇つぶしではなく、こうして巨大で複雑になりすぎた現代社会の中で、老人でもなく暇人でもなくとも、個としての自分を崩壊させないために必要なことのように思えるのです。

狩猟や釣りといった他の生命を相手にする野生の行為には、それによって自分の中に脈々と受け継がれてきた、そして自分でも気づいていなかった本来の生命の躍動を目覚めさせるのです。釣り人の本作りはそうしたものを手探りする作業かもしれません。そのために、こんなにたくさんの釣りの本が生まれるのでしょう。遅まきながら“水辺の写生帖”もそうして右往左往した一冊です。もうたくさんすぎるほどある百万冊の釣りの本にささやかな百万一冊目を加えることにしようと思います。

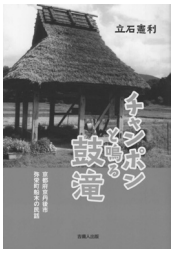
（画家・エッセイスト　柴野邦彦）

大物釣れた

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

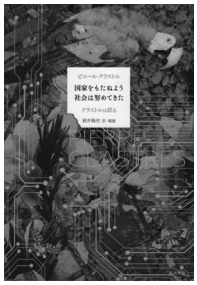
『チャンポンと鳴る鼓滝 ー京都府京丹後市弥栄町船木の民話』●立石憲利著



長年に渡り民話の採訪を行い、採録した民話一万以上、書籍として刊行してきた民話・昔話集200冊以上ともされる著者による最新民話集である。現在日本民話の会会長、岡山民俗学会名誉理事長、岡山県語りの会ネットワーク名誉会長などを務める。今回はかつて1990年代に著者の旧来の知己の方から送られてきたという京都丹後の弥栄町舟木の採録民話を元とした民話集である。収録されている民話・昔話は、死んだ妊婦による子育て譚「子育て幽霊」、継子いじめの定番である「椎の実拾い」、誰もが一度は聞いたことがある狐の化かし譚「風呂は湿田」等々、おなじみのものが多く、それらひとつひとつに著者もかかわった『日本昔話通観』（同朋舎刊）による話型名と話型番号が振られている。（U）

◆1400円・四六判・163頁・**吉備人出版**・岡山・202108刊・ISBN9784860696580

『国家をもたぬよう社会は努めてきた －クラストルは語る』●酒井隆史訳・解題 / ピエール・クラストル著



人類学がその対象とする未開社会とは国家のない社会である。しかしそれは、その社会がいまだ未熟な段階だから、不完全だから、国家を持っていないのではない。その社会が国家を拒絶する社会だからであり、支配と被支配に社会が分裂する契機を絶えず祓い除けてきたからである。それは「国家なき社会」ではなく「国家に抗する社会」なのだ…政治人類学という聞き慣れない学問の場所でこのように国家と権力について深く思索し、ついには国家をその玉座から蹴落とした本書の著者であるピエール・クラストルとは何者であろう。1934 年パリで生まれ、ソルボンヌ大学でヘーゲルとスピノザを研究後、構造人類学のクロード・レヴィ＝ストロースの学生となり、後に政治人類学研究を開始するも、影響力の極みにあるなか 1977 年、自動車事故によって他界。日本ではその名はそれほど一般的ではないがすでに『国家に抗する社会』（水声社）といった翻訳書が刊行されているようだ。本書は、1974 年にフランスの地方都市で刊行された独立左派「社会主義か野蛮か」グループによる『反 - 神話』誌に掲載されたクラストルのインタヴューを収録しているが、「国家なき社会」から「国家に抗する社会」へ、というこの「コペルニクス的転回」について読者はその大枠を知ることができるだろう。さらに、政治哲学者のミゲル・アバンスールによる序文や訳者による長大な解題によって「クラストル的思考」がどんな時代の文脈から生まれ、その後どう展開したのか、より詳細に知ることができるはずである。（N）

◆ 2600 円・四六判・267 頁・**洛北出版**・京都・202110 刊・ISBN9784903127323

『立花隆　長崎を語る －長崎が生んだ「知の巨人」 追悼と鎮魂、そして人類』●長崎文献社編 / 立花隆著

立花隆はジャーナリスト、評論家と呼ばれる。だが、田口富久長崎市長は本書に寄せた序文で、ピーター・ドラッカーを引き合いに、二人して好奇心の赴くままに社会のあらゆる現象に目を向ける社会生態学者であり、それぞれの手法で当事者感覚をもって直接社会に働きかける実践家であったと記している。見事に的を射ていると言えよう。原爆投下の 5 年前、爆心地から 600 メートルばかり離れた長崎医科大学病院で生まれた立花は、キリスト教徒であった両親に連れられ、追われるようにして北京に渡ったことで被爆を免れた。本書には、2011 年の長崎原爆資料館ホールでの講演「次世代に語り継ぐ戦争」、2010 年に『土木学会誌』に寄稿した「軍艦島に上陸して思う」など長崎に関わる講演録、論文 4 点と、2015 年の長崎大学での特別講義に基づく「ETV 特集　立花隆　次世代へのメッセージ～我が原点の広島・長崎から」を制作した NHK プロデューサーら身近に接した 4 名による立花論、家族史として「母の遺稿集と父の『長崎日記』」、初公開の両親と秋月辰一郎夫妻との往復書簡などが収められている。特別講義では、被爆体験を継承する意義を熱く語り、学生たちに徹底議論させ、考え、言葉にさせ、行動することを求めた。ナガサキ、ヒロシマ、アウシュビッツは立花の生涯のテーマであったという。中でも長崎は特別な土地であり、原点であったことがひしひしと伝わってくる。（飯澤文夫）

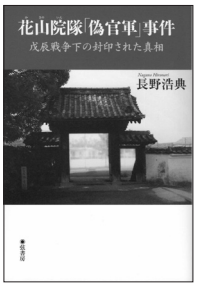
◆ 1300 円・四六判・235 頁・**長崎文献社**・長崎・202109 刊・ISBN9784888513661

『ユダヤ人を救ったドイツ人 －静かな英雄たち』●平山令二著

ナチス体制下のドイツにおいて行われたユダヤ人の迫害。それに加担する人や、見て見ぬふりをする人たちが多くいた一方で、ドイツ人でありながらユダヤ人を救うために力を尽くした人々もいました。本書はそうしたユダヤ人救出に力を尽くしたドイツ人について紹介しています。映画にもなったユダヤ系ピアニストをはじめ多くのユダヤ人を救ったヴィルム・ホーゼンフェルト大尉や、安全な街へユダヤ人を移送するのに尽力したアントン・シュミット軍曹などは軍人でありながら、政府の方針に逆らってまでしてユダヤ人を助けようとしました。それだけでなく多くの民間人もまた、ユダヤ人を自分の家に匿ったり、食料を融通したり、あるいは雇用したりするなどしてユダヤ人たちを助けようとしました。先に挙げたシュミット軍曹はナチス政権下で刑死しましたし、民間人であってもユダヤ人を匿うことは刑罰の対象であり、大きな危険を伴いました。なぜ彼らはユダヤ人を助けようとしたのか？末尾に引かれた救済者たちの行動の動機の調査として、同情や良心に従った結果ということが言われています。ナチスが社会を牛耳る中でも彼らはそれに踊らされず、自らの正しいと思うことをできる限り行いました。ネット上で排外的な言葉が飛び交い、そうした言辞を弄する政治家がのうのうとその職にとどまることが出来てしまう昨今のこの国において、本書に紹介された人々の姿はとりわけ強い印象を残します。（副隊長）

◆ 3200 円・Ａ 5 判・226 頁・**鴎出版**・千葉・202109 刊・ISBN9784903251202

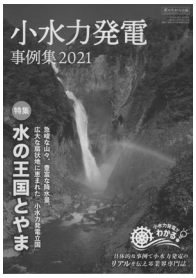
『花山院隊「偽官軍」事件 －戊辰戦争下の封印された真相』●長野浩典著



慶応４年（１８６８）１月の鳥羽・伏見の戦いは薩長中心の新政府軍が名実ともに新たな時代の担い手となった瞬間であった。以後「官軍」として錦の御旗を掲げて東征へと突き進む。そうした中「偽官軍」事件が起こる。有名なのは相楽総三の赤報隊事件であろう。相楽を隊長とする赤報隊は新政府軍の討幕先鋒隊として利用されたが、厄介者となると一転容赦なく切り捨てられた。「花山院（かさのいん）隊」もまたしかり。従来断片的にしか知られていなかった花山院隊「偽官軍」事件であったが、本書はその経緯を克明に描くことでその全体像を浮き彫りにすることに成功している。尊攘派の志士らが討幕を目的に結成した草莽隊の一つである花山院隊。名の由来でもある公卿の花山院家理を擁立。構成員の内訳は長州藩諸隊「報国隊」（支藩の長府藩に所属）出身が中心。当初、討幕へと隊員たちを焚きつけた藩上層部だったが、鳥羽・伏見の戦いでの勝利を契機に方針を転換、強盗・暴動行為とみなし弾圧し始める。一方、薩摩藩は彼らの行動を背後から支援していくなど複雑極まりない様相を呈す。事件の期間は、慶応３年（１８６７）１２月６日の天草富岡陣屋襲撃から翌年１月２４日の長州藩兵による御許山騒動の鎮圧までのほぼひと月半である。この間、九州幕府領の要である日田代官が逃亡、一時的に権力の空白を生じさせるなど討幕に一役買ったことは疑いない。昭和に入り彼らは「義挙」であると見直される。（Ｉ）

◆ 2100円・四六判・257頁・**弦書房**・福岡・202110刊・ISBN9784863292369

『小水力発電事例集　２０２１』●全国小水力利用推進協議会編



私達が生きていくためには、水、食量、エネルギーの三つの供給が絶対欠かせない。水から米や野菜などの食糧が生産され、水力発電のエネルギーも作られる。このことから水資源の他資源に対する優位性が考えられる。エネルギーとは「仕事をする力」即ち「もの動かす能力」のことを言う。エネルギーの働きは熱を出す、光を出す、動かす、ことである。具体的には自動車、飛行機、工場など動かすが、これらを動かすために石油、石炭、天然ガスの化石燃料を燃やして、現在は経済活動が成り立っている。このことで二酸化炭素を排出し、地球温暖化が進んでいる。二酸化炭素を排出しない再生可能エネルギーとして、水力・風力・太陽光、地熱の利用がある。この年刊誌は、地球温暖化を防ぐ小水力発電の活動に関して、具体的に全国の事例をあげる。今号の特集では、急峻な山々、豊富な降水量、広大な扇状地に恵まれる水の王国・富山の発電の特徴を記しながら、農業用水を利用し、発電した電力を売電システム化している愛本新発電所、小摺戸発電所、浦山新発電所等を紹介している。富山県内では７大河川には1000kw未満の小水力発電所53か所が設置済み。他県の例として、静岡県富士宮市「家康公揚水発電所」、同「白糸滝養魚場小水力発電設備」、「くまもと県民発電所」小水力第一号となった「南阿蘇水力発電所」、佐賀県吉野ヶ里町「松隈小水力発電所」も掲載する。

小水力発電システムが地球を救う。

（古賀邦雄・古賀河川図書館）

◆800円・Ａ４判・69頁・**水のちから出版**・東京・202110刊・ISBN9784991107924

『ねむりたりない －新鋭短歌シリーズ５７』●櫻井朋子著

“親指でスマホの通知なにもかも上に流してねむりたりない”本書は最後の７文字がタイトルとなった歌集。今、若者の間で短歌が静かなブームとなっている。31文字で表現出来る世界はＳＮＳと相性が良く、ツイッターで短文の読み書きに慣れた世代を惹きつける魅力がある。五七五七七の音律で作る以外に特にルールはなく、俳句と違って季語も必要としないため、現代的な感性を表現しやすく、日記感覚で気持ちを伝えられるのがブームの要因かもしれない。　そんな状況を背景に2013年から「新鋭短歌シリーズ」が１期ごと全12冊で刊行されてきたが、本書は第５期８冊目にあたる著者の第一歌集。“お茶筒がふすりと閉まる瞬間もいつか死ぬって信じられない”冒頭の歌と同様に現実との違和感を表現したり、“あの女も使ったかなぁ出汁巻のうずに差し込む基礎体温計”と嫉妬心を斬新に詠んでみる。４つの章から成り、それぞれ主体は異なり、全てが著者の境遇と一致しているとは言えないが、後半の章では結婚生活や女性といった性を扱った歌もあり、果実や花などの単語をうまく使いこなしている。新聞歌壇に投稿を始め、東京歌壇（東京新聞・東直子選歌欄）年間賞を受賞。その東直子が不安や嫉妬、情念や怒り、憧憬など、あらゆる感情がつまった歌集であり、肉体と感情が幸福に落ち合える場所を探すために歌を作り続けているのでは、と解説。ますますの活躍を期待したい。（Ｙ）

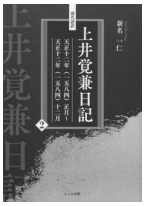
◆ 1700円・四六判・141頁・**書肆侃侃房**・福岡・202110刊・ISBN9784863854901

売行良好書

期間：2021年10月15日～11月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『水を招く』2700円・赤々舎　(2)『鬼の話』2000円・吉備人出版　(3)『情報の歴史２１』6800円・編集工学研究所　(4)『東西寄席演芸家名鑑２』2000円・東京かわら版　(5)『現代語訳　上井覚兼日記２』1800円・ヒムカ出版　(6)『かこさとしの手作り紙芝居と私』800円・石風社　(7)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(8)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(9)『占領下のトカラ』1800円・弦書房　(10)『大谷翔平　挑戦』1300円・岩手日報社　(11)『たぶの里』1200円・ナナロク社　(12)『大島紬の源流を探る』1800円・南方新社　(13)『瀬戸内寂聴句集　ひとり』2000円・深夜叢書社　(14)『地魚は今・・・ルポ漁』1900円・弦書房



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『昭和プロレスマガジン　５６』909円・昭和プロレス研究室　(2)『本の雑誌　Ｎｏ．４６２　２０２１年１２月号』667円・本の雑誌社　(3)『東西寄席演芸家名鑑　２』2000円・東京かわら版　(4)『東京かわら版　Ｎｏ．５７９　２０２１年１１月号』545円・東京かわら版　(5)『混沌の王』1500円・行舟文化　(6)『象の旅』2000円・書肆侃侃房　(7)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(8)『東西名品昭和モダン建築案内』1700円・書肆侃侃房　(9)『変格ミステリ傑作選【戦前篇】』1000円・行舟文化　(10)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房

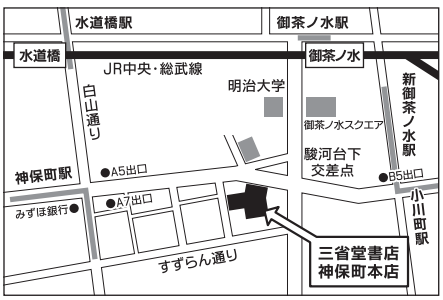
［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『現代語訳　上井覚兼日記２』1800円・ヒムカ出版　(2)『博物学者　佐藤清明の世界』900円・日本文教出版　(3)『金のオタマジャクシ、そして感性の対話』2200円・花乱社　(4)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(5)『戦国の北奥羽南部氏』2400円・デーリー東北新聞社　(6)『名古屋発　全国津々浦々行自転車大好き　第７号』500円・ブックショップ「マイタウン」　(7)『ジオパーク秩父　公式ガイドブック　秩父に息づく大地の記憶』1500円・さきたま出版会　(8)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版　(9)『東西名品　昭和モダン建築案内　新装版』1700円・書肆侃侃房　(10)『伊達の国の物語』2000円・プレスアート　(11)『占領下のトカラ』1800円・弦書房　(12)『下総原氏・高城氏の歴史　下』1400円・たけしま出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんが１１月９日心不全のため亡くなりました。99歳。ご冥福をお祈りいたします。2017年、瀬戸内さんが95歳になって深夜叢書社から刊行され当方が取り扱うことになった初めての句集「ひとり」は、2018年に星野立子賞を受賞。その後も著者がNHKの俳句講座に出演されるなど繰り返し何度も話題となり多くの読者を得ましたが、当初はわずか1000部ばかりで自費出版されたものだったとか。あとがきによれば、自分が死んだときに葬儀に来てくれた親しい人たちに配って見てもらえれば、ということだったようです。その後増刷が繰り返され、現在九刷となっています。本書は当「アクセス」誌2017年9月号新刊ダイジェストにて紹介いたしました。追悼の意味を込めまして以下に再掲させていただきます。【今年95歳を迎えた瀬戸内寂聴。高齢ゆえの身体の不調は否めないが、余命を愉しくしなければと思いめぐらすうちに突如「句集」という字が浮かぶ。著者と俳句との出会いは、初めての文芸書『田村俊子』を文藝春秋から出した頃にさかのぼる。当時の出版部長、車谷弘氏に俳句の会に誘われたのがきっかけだった。“御山のひとりに深き花の闇”“独りとはかくもすがしき雪こんこん”など、人間の孤独を表現した句が並ぶ。もちろん、それだけではなく、ボーヴォワールや司馬遼太郎を追悼した作品もあり、豊かな内容となっている。後半は吉屋信子や江國滋、鈴木真砂女など俳句にまつわる人物との交流や永遠の別れを綴った七編のエッセイを収録。タイトルは“生ぜしもひとりなり　死するもひとりなり”という一遍上人の言葉に因んでおり、苦しい時や辛い時、愉しいことを見い出しては生き抜いてきた著者のエネルギーが伝わってくる。】

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。